

Title	カルロ・スカルパの建築をつくるもの：ブリオン家墓地を巡って
Author(s)	城崎, 有沙
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 140-141
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53271">https://doi.org/10.18910/53271</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## カルロ・スカルパの建築をつくるもの

### — ブリオン家墓地を巡って —

城崎有沙／大阪大学大学院文学研究科博士前期課程2年

カルロ・スカルパの建築を独自のものとしているものは何か。その一つとして、建築物の細部を飾るモザイクや金具類、あるいは壁や床などの仕上げといった装飾的な要素が挙げられる。スカルパのデザインは、ヴェネトの伝統的な職人技に支えられて実現された。彼らの共同作業は、確かに魅力的な作品へと結実している。

しかし、ディテールだけでは建築は成り立ち得ない。彼の作品を訪れたとき、ディテール以外にも、建築作品においてスカルパらしさを作り出している重要なものがあると思われた。細やかな仕上げが活かされるためには、それを受け入れる空間が必要であり、そうした空間はスカルパの建築において欠かせない。

本研究では、スカルパの建築の本質とはどこにあるのかについて明らかにするために、建築の空間に焦点を当て、彼の晩年の代表作の一つであるブリオン家墓地（1969～78）を対象に考察を試みた。考察を進めるうえで、ブリオン家墓地の空間を作り出す契機として、以下のような三つの要素を設定した。

まず、第1の契機として挙げられるのは墓地全体の空間構造である。墓地とその周囲の環境との関係によって、建築空間が作り出されると考えられる。第2の契機となるのは墓地の内部空間である。つまり、ここで空間として考えられるのは、墓地内のそれぞれの建造物の持っている建築空間であり、そしてそれらの建造物を繋ぐものが作る建築空間である。そして、建築の内部空間が第3の契機となる。建築の内部空間では建築物と装飾の関係が重要な意味を持っていると考えられる。

ブリオン家墓地は、イタリアの家電メーカー、ブリオン・ヴェガ社の創始者であるジュゼッペ・ブリオンと彼の家族のために建設された。生まれ故郷のサン・ヴィットに葬られることを望んだジュゼッペの遺志を受けて、1969年に妻オノリアナはスカルパに墓地の設計を依頼した。墓地の敷地はイタリア、ヴェネト州のサン・ヴィットにある村の共同墓地の北東側に隣接するL字型の土地、約2200㎡である。墓地は敷地の南端にあるウォーター・パビリオン、西端の礼拝堂、そして敷地のほぼ中央、L字の角の部分にあるブリオン夫妻の墓を中心に構成されている。

この作品では、施主は隣接する共同墓地との調和を重視するという点以外にはほとんど要求をしていない。スカルパがそれまで数多く手がけてきたレスタウロや美術館の展示計画などの作品と比べると、制約ではあるがインスピレーションの源でもあった設計上の条件はかなり少なく、ほぼゼロに近いところから発想しなければならなかった。つまり、ブリオン家墓地はほぼ一から作られた建築作品と言えるだろう。この作品では、どのような空間をどのように作り上げようとしたのか、ということが他の作品よりも明らかに示されていると考えられる。

サン・ヴィットの集落を離れ、南西にしぼらく歩くと、ブリオン家墓地の外壁が畑の中に現れる。敷地南側のウォーター・パビリオンを囲む外壁は、外側の風景を完全に遮断しているが、村の方向となる北側と東側の外壁は、内部を盛り土することによって、人が墓地内部に立った時の視線とほぼ同じ高さとな

る。これによって、壁越しに見える風景から日常的な町並みが消し去られ、教会の鐘楼や遠くに見える山々などの遠景のみが借景とされる。また、共同墓地から切り離された印象を与えるのを避けるために、共同墓地に面した入口棟側の一部分は壁を設けずに階段状の高低差を付けるのみにとどめられている。

スカルパは、「あくまで村の人と同じように共同墓地に眠る」墓であるという施主の強い要望に対して、私的な墓地を建てると同時に、既存の共同墓地を拡張して「小さな町のための公共のオープンスペース」を作るものという基本構想を立てた。周囲との繋がりが重視されたのは、一人の人間とその人間を取り巻く環境との関係を、ひとつの墓地と隣接する共同墓地やその周囲との関係という形で表そうとしたと考えられる。つまり、まず初めに、第一の契機となる墓地全体の空間構成から、墓地は全体として、一つの独立した空間でありながらも、隣接する共同墓地との調和を持った空間であることが分かる。

では、第2の契機となる内部空間はどのように構成されているのか。墓地内に点在する建造物の間は、入口棟や通路を通して行き来することができるが、訪問者は墓地の全てを一度に見渡すことはできない。個々の空間を結びつけ、空間全体に繋がりをを持たせる要素となっているのは通路ではなく、スカルパが生命を象徴する要素と捉えた「水」である。最終案では実施されなかったが、パヴィリオンと礼拝堂を囲む2つの池を繋ぐ水路を設けるという案も考えられていた

そしてまた、ブリオン夫妻の墓の上部に架けられたアーチも空間を繋ぐ要素となる。アーチは敷地のほぼ中心に位置し、南側と西側のそれぞれの空間を繋ぐ。さらに、死者とその家族、かつて属していた社会をアーチは繋いでいる。ブリオン家墓地は一つの家族のため

の墓であると同時に、ジュゼッペ・ブリオンという一人の起業家のための記念碑でもある。家族はジュゼッペに対する畏敬の気持ちをこの墓地に表そうとした。造形的にも、アーチに他の建造物にはない曲線を与えられていることで差異が強調される。

第3の契機、装飾については、実際の設計作業から明らかにできるだろう。設計に際して、スカルパはかなり早い段階で計画の基本的な骨格を決定し、細部についてスタディを繰り返すという手法を採った。つまり、建築への装飾は、スカルパの場合、装飾の積み重ねが空間を生み出されるものというよりもむしろ、個々の建造物空間の繋がりにから装飾が培りだされて建築家の意図をより明確に示し、強調する要素となるものと考えられる。

このように、三つの契機によって考察した空間構成、つまり墓地全体の空間、墓地内部の空間、装飾は、それぞれに重なり合いながら存在し、単独の形で明確には現れない。また、彼がブリオン家墓地に求めた意義、そして建築にかけた時間や手間は、ある意味では無駄なものとも思われる。しかし、こうした不確かで、余剰にみえるところにこそ、スカルパの建築の魅力があり、彼の建築の本質に繋がる要素を見いだせる。